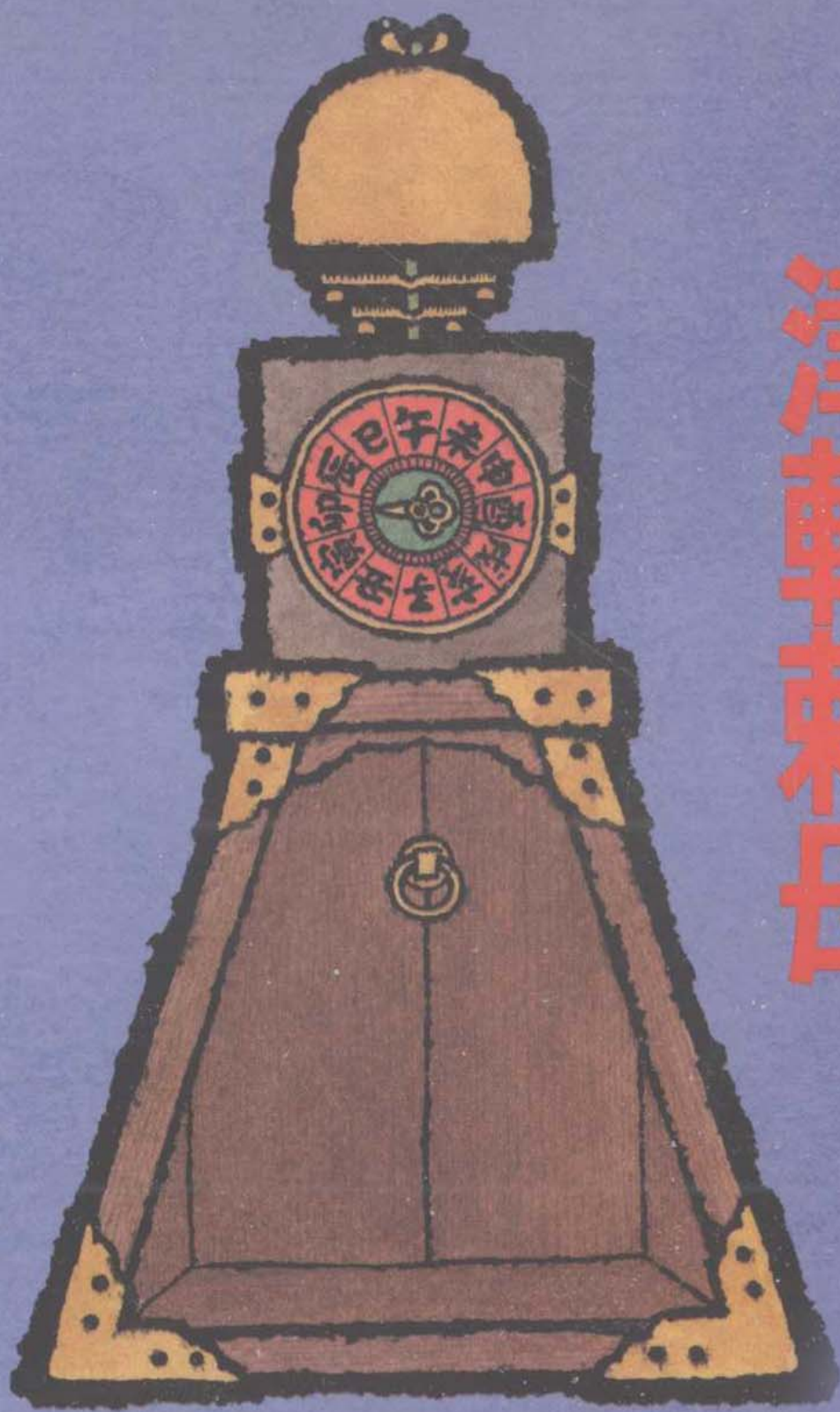


長谷川伸



相馬大作と
津輕頼母

徳間文庫



そうまだいさく つがるたのも
相馬大作と津軽頼母

© 1987 財団法人新鷹会 Printed in Japan

603-4

1987年3月15日 初刷

著者 長谷川伸

発行者 荒井修

東京都港区新橋四一〇千一〇五
発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当 前島不二雄〉

ISBN4-19-598248-0 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

相馬大作と津軽頼母

長谷川 伸



徳間書店

目次

出訴

5

七十里突破

25

佐々木大吉

59

兵聖閣

80

露寇防衛

110

萱次郎の死

139

岩拔山

169

津輕隱密

191

失敗

233

脱 出

265

召捕りの前

299

召捕りの後

325

津軽家騒動

362

後記（昭和三十七年度）

404

解説 伊東昌輝

409

出 訴

1

南部領の馬門まかどの関所と津輕弘前藩の支藩黒石津輕家領の狩場沢かりばさわの関所とは、その隔り一里にも足りない。三木光齊がつくった古い『奥羽要誌』おううようしでは五丁と記入されている。それほどでもないがいわば目と鼻、それでいて馬門と狩場沢とは民俗までが違っている。狩場沢で右だといったら馬門では左だという、まさかに右の足を左の手というほど強いて逆にいいはしないが、そういういかねないものが双方の人の間にある。

文政四年四月六日の昼七つ刻どき、旅拵たびごしらえの男が一人、短い刀を一本腰にさし、ずかずか狩場沢の関所へはいってきた。時刻は今の午後四時ごろ、春だから日はまだ高く、豪雨の後の空が晴れていた。

狩場沢の関は仲の悪い南部領関所の馬門に対した関所で、逢坂小源司という平内ひらないの町奉行所から派遣されている武士が一人、地もとの者をつかって閑散勝ちな関守をやっていた。

一人の旅の男が今、関所の柵さくの内へ無遠慮にはいってきたので、関所の小者が叱しかりつけたが、

旅の男には何といったのか解せなかったので、冠っている笠かさをとるのも忘れて棒立ちになった。小者は怒って六尺棒をとりに行き、怒鳴りながら引返してきた。土地訛なまりでいうことが旅の男には解せないのだ。

ようやく気がついて冠っていた笠をとった旅の男の顔に、流れる汗が三本ばかり真黒な雫しずくをつくっていた、紫色に変わっている唇が歪ゆがんでいる、左の頬ほおの肉がぴくりぴくりひきつってさえた。腮あきに一カ所うしろ頸くびに斜めに一カ所、木の枝にはじかれたのか篠萱しのかやの葉が撫なでて切ったのか、血が滲にじんでいた。

今度は小者の方がびっくりして、

「何だば」

といっただけで、あっけにとられた。

旅の男が何かいい出したが、津軽領狩場沢村に生れて育ち、知っているのは平内と黒石ぐらい、弘前さえ知らぬ若い小者は、馬門から向うの南部言葉なら聞きわけられるが、この旅の男の言葉を解しかねた。

番屋の奥の方にいた関役人の逢坂小源司は、獵の仕掛け物をせっせと作っていたが、小者の声高とそれに続いた聞き慣れない人声に気がついて、刀架から小刀をとり大刀をとり急いで出てみた。ひと目でこれは当り前の関所通行のものではないと見てとった。

と、旅の男の方でもこの人がこの関所の役人だと見てとったのだろう、土下座して両手をつ

き慇懃に、

「わたくし事は、仙台出生の者にござります」

と、力をこめて一語ずついった。言葉がシがスと聞える仙台発音である。

小源司はうんとすんともいわず、じろじろ見ている。

旅の男はもう一度頭を深くさげて、両手を懷中に入れ、一通の封書を取り出し、

「これをご一覽願ひ奉ります、但し、極秘のことにござります故、お役人様のみご一覽を願ひ奉ります」

と、前へ進み寄つて差しあげた。

小源司は黙つて受取つた。半紙を折つて飯粒糊で貼つた上表紙の表に、「上」と一字書き、裏の封じ目の終りに行書で封とだけある。小源司は、上表紙を剥ぎとり、中の二つ折の半紙をとり出して数行の文字に眼をはしらせた。

旅の男は土下座のまま膝に手をのせ、小源司が読み終るのを眼を据えて待った。そのやや遠くに六尺棒を立てて見張っている今し方の小者がいた、それに旅の男は眼を向けもしなかった。読み終つた小源司の眼がしばらくの間、旅の男に向けて凍りついた。封書の内容は次のごとく、驚愕で息がとまるようなことであつた。

恐れながら御忠信奉り候

御当君様、この度、御下向に付、秋田大館碇が関の間にて必定の御難相見得候条、神の

御知らせにも御座候や夢の如く相聞え候間、もし御用心の御心得の為に罷成り候やと、恐れながら御忠信仕候、以上

文政四年四月 日

津軽御役人様中

忠信は注進の宛字で、文章は書き流しに改め、句読や送りがなを入れはしたが、原の通りである。

署名がないからこの旅の男が注進状の本人か使いか、小源司にまだわからずにいる。ようやくにして心が整ったので、

「半四郎を呼んでこい、急用だ」

と、小者に命じて走らせた。半四郎というのは狩場沢の農人で村聞き役という役目のものである。

半四郎が大急ぎで駆けつけてくるまでに小源司は、仙台出生の男にここへくるまでの道順を聞いた、その答えは南部領からきたとだけだった。

半四郎がきたので小源司は、

「ここは手ぜまだからお前の家へこの男を連れて行け。すぐあとからこの方が行くから待っていろ」

と命令した。

半四郎は四十あまりのしつかりした顔つきの男だった。

「わたくし宅でもよろしゅうござりますが、産婦がおりますので、赤児あかごの泣声などで、大切なご用には如何いかかと存じます。兵助の宅がよろしいかと存じます」

と、いった。半四郎はいろいろの経験が豊かだとみえて、小源司と旅の男とを見較みくらべて大切なご用と見てとった。

「そうか、では、兵助宅にしろ」

「はいっ」

半四郎はただ一言だけ旅の男にわしと一緒にきてくれといった。兵助の家へ着くと、兵助に一室をご用で借りるといつてから、旅の男に足を洗わせ、一室へ連れていくのに必要な短い言葉言葉を口にしたただけだった。

2

まもなく兵助の宅へ、衣服を改めた逢坂小源司がきて、小源司と聞き役の半四郎とで、仙台出生の男の最初の尋問がはじまった。

山の木を伐きり倒す斧おのの響きが、ときどき、こだまして聞えた。

小源司を追いかけてきたごとく村飛脚がきて台所に控えた。ここの関所が直屬している平内の町奉行所へ注進の手配を、早くもつけたのだった。

小源司が旅の男に、

「その方の名前は何と申し、住むところはどこだ」

と尋ねると、仙台出生の男は無愛想な顔をして答えた。

「わたくしの名前、居どころなど申しあげて、それが漏れましては、この命を奪われ犬死を遂げまする懸念がござります故、申しあげかねます。追い追い又承^{うけたまわ}りまして、又々罷^いり出でましたる節、名前居どころを申しあげます」

「他に漏れるごときことは誓っていたさぬから、明かしてくれ」

しばらく考えてから旅の男が、

「それでは申しあげます。わたくし出生は仙台領江刺^{えさし}岩谷^{いわや}堂^{どう}でござります。この節は南部中奥通りに住居いたします。名は嘉兵衛^{かへえ}、三十四歳、職分は刀鍛冶^{かたなかじ}にござります。もともと本名は喜七にござりまするが、南部様に同字の忌みでござ慮^{おそ}いたしまして、嘉兵衛と名乗っております」

ここまでくると喜七の嘉兵衛は、今までのように仙台言葉でなく、南部言葉が混ったいい方になった。津軽の人が南部風を喜ばないことを知っているので、嘉兵衛は仙台言葉を初めつかったのだった。

小源司は肝要な注進の内容に質問をすすめた。それに答える嘉兵衛に疑う余地のない真実が溢^{あふ}れているので、小源司は嘉兵衛のいう一々を、聞き漏らすまい聞き誤るまいと努力した。

嘉兵衛はまず最初にこういった。

「津輕様御^{ごとうぎん}当今の君を、このたびの御道中先、大館^{やまあい}辺の山間にて山賊態^{てい}のもの、不意に襲い奉る企^{たくら}みがござります」

小源司は驚きかけたが自ら抑えた。聞き役の半四郎は顔の色を変えた。

嘉兵衛が続けた。

「お供先にも討ちかかり奉り、永くご外聞にも拘^{かかわ}りまするがごとき企みでござります。それに入用の怪しき道具は先頃^{さきごろ}からすでに拵え、その者どもが所持にござります」

齒^{きめ}に衣着^{きぬ}せたいいい方だが、嘉兵衛がいうことは容易に推測が出来る。江戸を去る四月三日発向、国もとの弘前に下向の途に就いている津輕家第九代越^{えつちゆうのかみやすちか}中守寧親を何者かが要撃するというのである。きょうは六日だから越中守は道中ですでに三泊を過している。

「その曲者^{くせもの}の人数は幾人か」

「山賊態のものは五、六人、いずれも命知らずの者にござります。又偵察^{みわけ}のもの兩人がござります。これらの名前も存じておりますが重ねて罷り出しました時に申しあげます。大館から碓関までの間、わずかの場所にはござりましょうがご油断なきよう重ねて申しあげます。もつともご威光におそれ、出兼ねることもござりましょうなれど、企みの儀は決して相違ござりませぬ。その者どもの話合いには、当月中頃、お通りなるべしとありましたればご用心のほど、くれぐれも願ひ奉ります。つきましては」

と、何か新しくいい出しかけた。

小源司は深くうなずいて嘉兵衛の口を促した。

「わたくしごとき者より申しあげまするは如何かと存じまするが、心づきましたるまで、申しあげます。それは、忍びの者も数多あまたこれあるかと存じまする故、よくよくご用心なされませぬと危あやういかと存じます」

小源司は答えないのみか苦にがい顔までした。黒石一万石の津輕甲斐守親足かいかみちかたりの家来の逢坂小源司から考えても、本藩の弘前城主十萬石の津輕越中守寧親が、山賊態のもの共を怖おそれて間道かんどうを忍んで通つて帰国ができるものか。

嘉兵衛は小源司の苦い顔に気がつかなかった。嘉兵衛はかんじんなことはすでにいつてしまつた気で、

「わたくしはすぐさまこれから立戻り、又々罷り出でまして、その後の様子をご注進いたしまする」

と、別れの言葉を口にした。

半四郎がそのとき傍からいった。

「嘉兵衛どの、路銀はいかがですな」

「僅わずかながら用意がござります」

「でもあろうが、ただ今、若干いくばうか頂けるようにお口添えいたしましょうか」

「それには及びませぬ。後日に至りまして、ご注進の験げんがござりましたる節は、多少に拘らずご褒美頂戴ちやうだいさせたき者がござりますが、ただ今は決していりませぬ」

小源司が心づいて、

「今いったそれは何者のことだ」

「今度参りましたる節申しあげます」

「その方は南部にゆかりはないか」

「わたくしは南部出生の者でござりませぬ故、よしみはいささかもござりませぬ」

「徒党の者は、何の趣意にてこの企みか、存じているだろう」

「それは、申しあげずともお心づきと存じますが、南部様にはご不幸にてご昇進がござりませぬ、そのうらみと申すことにござります」

「そういわれれば、なるほどと思うことがないでもなかったので小源司は、深く尋ねずに、

「して、ご当家様へご注進の筋が、その方にあるか」

「ござりませぬ」

「では、何として危きを冒し、注進に参ったのか」

「太平の時節、悪を去り、善につくは、人間の本義と存じ、それ故のご注進でござります」

と、嘉兵衛は胸を張って何故そんなことを尋ねるかといわぬばかりに答えた。

逢坂小源司は帰ろうとする嘉兵衛を引きとめておいて、報告書を作った。台所で待っている飛脚にそれを渡し平内の町奉行所に急がせた。そのあとで、半四郎に嘉兵衛を引きとめさせておいて、『嘉兵衛申口覚え』を作った。

夜に入ってもいいからひとまず帰りたいという嘉兵衛を、宥めつ、すかしつして、酒と飯と話とで引きとめた。

狩場沢村から平内までは四里あまりある。平内とは小湊こみなとのことで、海に突き出たところなので平内半島といったり、夏泊崎なつとまりがあるので夏泊半島といったりしている。平内三カ村といって、東と西と中との三つの村から成るここの町奉行は天内蔵之丞あまなひといった。小源司の報告書は蔵之丞宛である。

思いもかけぬ隠謀を知った天内蔵之丞は水の流るごとく処置をとった。まず奉行所の内外に箝口令かんこうれいをくだし、最も健脚な飛脚に出発の仕度をさせ、黒石藩の用人奥平平右衛門、家老境修令の両名に宛てた報告書をつくり、逢坂小源司の報告書と自分が折返して小源司に与えた命令書の写しを同封して、飛脚を黒石に差立てたのがその日の夜更けだった。

天内蔵之丞は小源司に向けて、嘉兵衛を決して手放してはならぬ、なお、嘉兵衛を至急に平内へ呼上げのため足輕堀田金蔵を遣わすから、狩場沢村より人足を出して堀田の指図を受けさ

せるようにと命じた。

堀田金蔵には、

「嘉兵衛が呼上げを迷惑がり、途中にて逃げんとする気配がみえるか、又はかれこれと異議に及びなば、縄下なわしたにして引立て参れ」

と、命じた。縄下とは外から見えないように懷中に手を縛るということである。首に縄をつけても連れてこいという意味である。

その頃としては恐ろしい迅速さだった。翌日は四月七日。朝のうちに狩場沢村から村聞き役の半四郎が、平内の町奉行所へ汗をかいて飛びこんできた。さっそく、奉行天内蔵之丞が会つて嘉兵衛の申口を残らず聞きとった。その日遅くなって、堀田金蔵らがつき添って平内に嘉兵衛が着いた。宿は奉行所の指図で太田屋孫四郎方と決めてあつた。そこへその晩泊つた嘉兵衛はかなりの優遇をうけた。奉行所の方ではちつとも油断せず見張り番を太田屋の内にも外にもおき、太田屋の主人孫四郎にも責任を持たせた。

奉行はその間に直接に嘉兵衛から注進の内容をたしかめて、黒石の境修令、奥平平右衛門宛に第二の報告書をつくり、今後の処置について指揮を仰いだ。

これで四月七日が終つた。

黒石藩というのは藩祖を津輕十郎左衛門のぶあき（信英）といい、津輕宗家の藩祖右京大夫為信の孫である。宗家二代の藩主は越中守信牧のぶみら、その次男が黒石藩祖の十郎左衛門である。十郎左衛門